

横波を受けた岸壁係留船の波浪動揺解析  
(各種解析法による比較)

大阪市立大学工学部 正員 小田 一紀

大阪市立大学工学部 正員 倉田 克彦

大阪市立大学大学院 学生員 石上 昌男

東洋建設(株) 竹田 正彦

**はじめに** 従来、一様直線岸壁前面における係留矩形浮体(船舶)の動揺問題を取り扱う場合、井島らによる浮体と流体との相互作用を考慮した厳密な境界値問題としてのポテンシャル接続法(領域分割法)があり、またその理論のポテンシャルの無限級数項を省略した場合にはほぼ相当する伊藤らの近似解法などがある。また最近において境界要素法を用いた例はあるが、著者らの知る限りでは、これららの理論を実験によつて十分に検証し、また相互にそれらの長短を比較した研究は極少ない<sup>1)</sup>。そこでまず井島らのポテンシャル接続法に基づく理論値と実験値の比較検討を行なつたので、表-1に報告する。

**解法の概要** 論理の詳細は文献1)に委ね、表-1は理論の概要を述べる。

2次元運動を考え、図-1に示すように一様直線船直壁から距離 $z$ 離れた位置に幅 $2l$ 、吃水 $h$ の2次元矩形断面浮体が存在し、左側からの入射波により微小運動するものとする。流体運動は非圧縮性の完全流体における無遇運動とする。図-1は示すように流体領域を $x=2l$ を境界面としてI、IIおよびIIIに分け、各々の領域におけるポテンシャルは自由水面と木底、および浮体の下面と木底における境界条件を満足するラプラスの方程式を解として表-1のように与えられる。これらの速度ポテンシャルに含まれる未定係数は仮想境界 $x=2l$ における圧力および水平流速の連続条件により決定でき、従つて浮体の運動やこれらに伴う流体力が求まる。

表-1

$\Phi_1(x, z) = (A e^{ikx} + B e^{-ikx}) \frac{\cosh kh(z+h)}{\cosh kh}$	$\Phi_2(z, z) = \sum_{s=0}^{\infty} \left[ D_s \frac{\cosh \bar{s}z}{\cosh \bar{s}l} + E_s \frac{\sinh \bar{s}z}{\sinh \bar{s}l} \right] (1 - \bar{s}^2)^{-1/2} J_0(\bar{s}(z+h))$ $+ 2l (-1)^s \frac{h}{l} \left[ P_0 \cos \mu_s z + W_0 J_0(h) \right] \frac{\sinh \mu_s z}{\mu_s h} \frac{\cosh \mu_s(z+h)}{\mu_s h} \frac{\sinh \mu_s h}{\mu_s h}$	$\Phi_3(z, z) = F \frac{\cos k(z+pl)}{\cosh kpl} \frac{\cosh kh(z+h)}{\cosh kh}$ $+ \sum_{n=1}^{\infty} G_n \frac{\cosh K_n(z+pl)}{\cosh kpl} \frac{\cosh K_n(z+h)}{\cosh kh}$
--	---	---

$A, B, C_n, D_s, E_s, F, G_n$ : 定常係数,  $\bar{s} = s\pi/l$ ,  $\bar{g} = 1-g$ ,  $\mu_s = (2s+1)\pi/2l$ ,  $\bar{\mu}_s = \bar{s}\pi/l$  ( $S$ は整数),  $h$ : 水深,  $g$ : 重力,  $w$ : 波高,  $k$ : 波数,  $K_n$ : 次式で決まる固有値である。 $\frac{\partial^2 \Phi}{\partial z^2} = k^2 \tanh kh = -k_n h \tanh k_n h$  ( $n = 1, 2, 3, \dots$ ) ( $g$ は重力加速度) SWAY, HEAVE, ROLL, リブ系振幅も同じよう。

■矩形断面の運動方程式

$$\frac{M \frac{d^3 x}{dt^3}}{dt^3} = P_1 + P_2 + R_H \quad \text{--- (a), } M \frac{d^2 z}{dt^2} = P_2 - 2\rho g h l + R_V \quad \text{--- (b), } I \frac{d^2 \theta}{dt^2} = M_P - 2\rho g h l \cdot \bar{G} \bar{H} + R_M \quad \text{--- (c)}$$

$M$ : (浮体質量の質量)  $= 2\rho g h l$ ,  $I$ : 垂直に作用する慣性モーメント( $\rho g h l^3$ ),  $P_1$ : 外界波,  $P_2$ : 銛波,  $R_H$ ,  $R_V$ ,  $R_M$ : 干渉力,  $M_P$ : 浮力(または回転モーメント),  $\bar{G}$ : 浮力中心,  $\bar{H}$ : 浮力中心高さ

**検証実験** 検証実験として2次元木槽を用いて一定水深( $h = 20\text{cm}$ )を行なつた。入射波は規則波でその波高は3cm程度、周期は0.60~1.74secである。矩形浮体は本鏡、その諸元及び係留時間有周期は表-2に示すところである。係留は図-1に示すように伸縮性のないビアンキ繩で板バネ( $k = 0.36\text{kg/cm}$ )に繋いで対称係留を行なつた。またバネの高さ $H_0$ は、静水面上8.7cmである。浮体の運動はポテンショメータを用いて自由表面運動計測器で測定した。

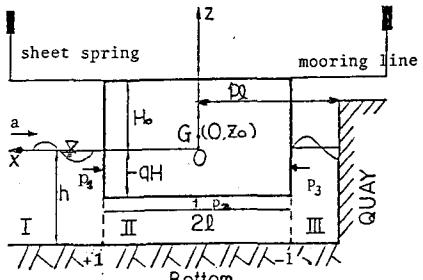


図-1 係留矩形断面浮体

## □理論値と実験値の比較並びに考察 図-2(a), (b)

及び(c)は $P=2.0$ ( $p_0=30.8\text{cm}$ )の場合のSWAY, HEAVE及びROLLの無次元振巾幅の理論値及び実験値を示す。横軸は波周期 $T(\text{sec})$ である。また図-3(a), (b)及び(c)は $P=3.0$ ( $p_0=46.2\text{cm}$ )の場合を示す。図中の $\alpha$ は波振幅である。

(a) SWAY  $P=2.0$  及び  $3.0$  の何れの場合も  $T < 1.0$

(sec)でよく一致している。Tが長くなると理論

値は実験値より若干大きな値を示している。実験では、初期係留であるにもかかわらず、入射波は進入直後のしばらくの間、温湿度振動が走り長い周期のSWAYの減衰振動が見られた。また定常漂流力によつて平衡位置は初期釣合位置より若干岸壁寄りに存在したと記載された。このような傾向は短い周期ほど顕著であった。

(b) Heave heaveの共振時を除いて、理論値と実験値の何れの $\alpha$ の場合でもよく一致している。横木らも指摘しているように、共振時の粘性減衰項を考慮すれば補正できよう。

(c) Roll heaveと同様共振時付近を除いて非常によく一致している。しかしの減衰振動実験から粘性減衰力を求めて理論の補正を行なえば、共振時の不一致もかなり改善されるものと思われる。理論の共振周期は実験値とよく一致している。

## □あとがき 理論値

ある波周期 $\alpha$ と $=3.0$   
小さなピークを示すと  
これはあるがその原因  
についには現在不明である。  
今回は実験ケースを増やし、  
また他の解法との比較  
を行なう予定である。  
これらの結果については講演当  
日に発表した。(参考文献)  
りたることは本論文、および参考論文、引用論文  
参考文献、4)横木ら、第26講論。

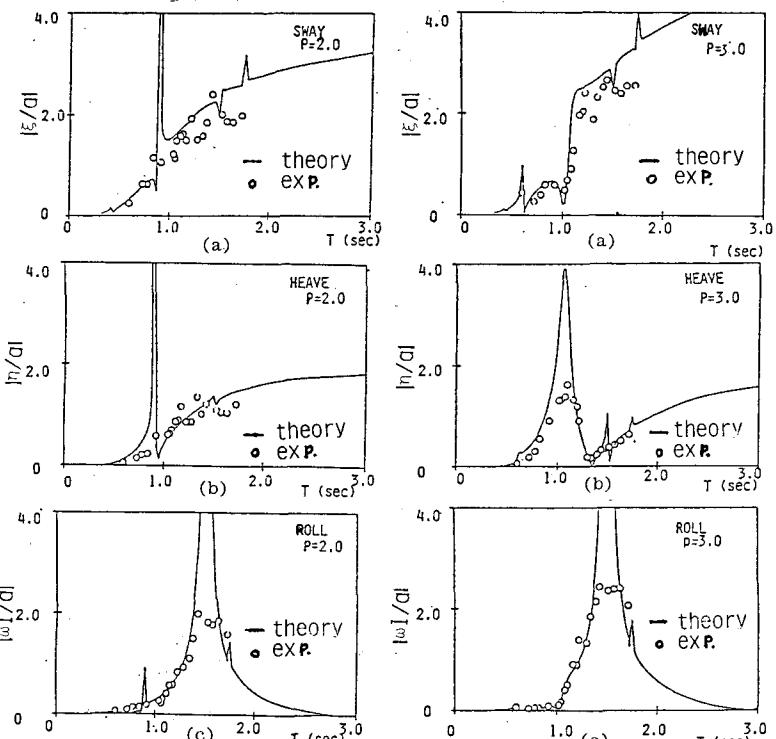


図-2 理論値と実験値の比較  
( $P=2.0$ )

表-2 矩形断面浮体の諸元

諸元	記号	数値
長さ	L	206.0 cm
幅	B { = 21 }	30.0 cm
吃水	D { = q h }	10.0 cm
重心の2座標	Z <sub>c</sub>	4.0 cm
重量	W	63.885 kg/cm
慣性モーメント	I	$6.38 \times 10^3 \text{ kgf}\cdot\text{cm}^2$
係留時の固有周期	( $P=2.0$ )	( $P=3.0$ )
ROLL (sec)	1.55	1.55
HEAVE (sec)	0.91	1.00
SWAY (sec)	10.35	11.90

図-3 理論値と実験値の比較  
( $P=3.0$ )